

江戸御城絵図

〔サイズ〕全体法量 27.9 × 38.5 cm (折畳時 14.5 × 5.3 cm)

〔紙質等〕楮紙、手書彩色

〔方位・縮尺記載〕御殿図…なし、城郭図…南

〔所蔵・伝来関係〕東京大学史料編纂所維新史料引継本Ⅰより 1341

所蔵印「維新史料編纂会」

〔維新史料編纂会図書 1323 大正五年五月二十六日〕「購入」

〔表題〕「江戸御城絵図 立花」(包紙および表紙墨書)

本史料は、二枚の絵図(御殿図と城郭図)からなる。一つは、七代將軍徳川家継(八代將軍吉宗時代(正徳・享保頃)の江戸城本丸御殿の表と奥を描いた絵図(御殿図)である(図1)。御殿への入口や各部屋の名称が書き込まれ、江戸城の表と奥の間取りが把握できる。また、二ヶ所ある「奥」との記載(図4)は、表、奥、大奥の境を示していると考えられる。表と奥の境を示した絵図は珍しい。さらに、大広間、白書院、黒書院など城内での儀礼が執り行われる場、および帝鑑之間、雁之間、菊之間等、大名や旗本の殿中席となる部屋には障壁画の図様とその作者が記されている。他方、もう一つの絵図は、駿府城の城郭図である(図2)。方角を示す「南」という文字以外には、文字情報は記載されていない。二枚の絵図は、貼り合わせられ折り畳まれている。絵図の包紙および表紙に「立花」とある(図3)。筑後三池藩第四代藩主立花貫長(一六八七―一七四七)は、享保九年(一七二四)九月一日、駿府加番に任じられている。本絵図が正徳・享保頃の江戸城の御殿図、および駿府城の城郭図の二種類から構成されるものであることから考えて、この絵図の元々の所持者は、筑後三池藩主立花貫長である可能性が高い。

【内容年代】

江戸城本丸御殿図

絵図の内容年代は七代將軍家継期(八代將軍吉宗期)であり、絵図自体は享保期頃に描かれたと推測される。

中之口の入り口付近に「戸田五助」という記載がある。戸田五助は名を勝房といい、戸田家は代々鷹匠頭を務めている。鷹匠頭は五代將軍綱吉の時代、天和二年(一六八二)に廃止されるが、享保元年(一七一六)八月、八代將軍吉宗が再置し、五助を鷹匠頭に任命した。天和二年に鷹匠頭が廃止され、享保元年に鷹匠頭が再置されるまで、五助は大番や新番を務めているが、その当時、個人の部屋が与えられていたとは考えにくい。したがって、享保元年に五助が鷹匠頭へ任命された際、役職の下部屋として、新たに部屋が与えられたと考えるべきであり、この絵図は享保元年以降に描かれたと推測される。しかし一方で、七代將軍家継期の特徴とみられる「女中詰所」が存在すること、奥向衆下部屋に「御時斗間ハシヘヤ」「御時斗間バンヘヤ」の転記(ミスカ)とあり、享保元年五月に廃止された時計之間番の下部屋が存在すること、御座之間付近に御休息之間が存在しないこと(御休息之間は吉宗が將軍就任直後に廃止し、享保一二年に再造営)などから、七代家継時代から八代吉宗時代初期にかけての状況が入り混じった絵図となっている。

また、障壁画の図様と絵師の記載は万治二年(一六五九)以降、弘化元年(一八四四)以前の状況であること、蘇鉄ノ間に「カノ如川」(狩野如川周信か)との記載があることを踏まえても、七代將軍家継期(八代將軍吉宗期)頃の絵図であれば矛盾がない(深井雅海『図解 江戸城をよむ』原書房、二〇〇三年を参考)。なお、障壁画について詳しくは後述する。

駿府城城郭図

文字情報がほとんど記載されていないため、正確な年代は不明。しかし、御殿図の内容年代が正徳・享保期であること、元の所持者と考えられる立花貫長が享保九年に駿府加番に任じられていることから推測すると、享保期頃の絵図ではないだろうか。

表1 障壁画の図様及び絵師の一覧

場所	絵画	絵師（記載）	絵師（名）	備考
遠侍間	獅子牡丹	カノ右近孝信	狩野孝信	狩野右近常信の誤りか。
御次	雪竹	カノ右京	狩野時信	
殿上ノ間下段	花鳥	養朴	狩野常信	
虎ノ間	竹虎	永真	狩野安信	
蘇鉄ノ間		カノ如川	狩野周信	
大広間 三ノ間・五ノ間共	松鶴	探幽	狩野守信	
松之間	松鶴	同筆		狩野探幽か。
後ノ間	松雪柳鳥	養朴	狩野常信	
松ノ御廊下	小松千鳥	□□		狩野寿碩か。
白書院上段	帝鑑			
帝鑑之間 次・三之間共		永真	狩野安信	
連歌ノ間	松竹	養朴	狩野常信	
紅葉ノ間		カノ宗仙	狩野政信	
小十人番所	水鳥水車	連里法橋	不明	
竹之御廊下	雪二竹	養朴	狩野常信	
菊ノ間	マセキク	カノ弥右衛門	狩野興甫	
躑躅間	岩ツツジ	長谷川等徹	長谷川等哲	
雁ノ間	芦雁	休伯	狩野昌信	
芙蓉間	フヨウ小鳥			
款冬ノ間（山吹間）		洞雲	狩野益信	
焼火ノ間	右竹笹	カノ柳雪	狩野秀信	
黒書院下段	山水	探幽	狩野守信	
黒書院上段	唐山水			
後ノ間		同筆		狩野探幽か。

【凡例・序・跋等】
 ▼ 凡例（御殿図） ※城郭図には凡例なし。
 赤 御廊下向
 何レ茂畳敷有之
 黄 御間内
 部屋二者不残二階有之
 【図中の主な文字記載】
 ▼ 障壁画の図様および絵師の一覧

表1は、御殿図に記載された障壁画の図様および絵師をまとめたものである。御殿図の障壁画の記載は、万治二年（一六五九）の再建時以降の状況を示したものとみられる。蘇鉄ノ間には「カノ如川」とあり、これが狩野如川周信（一六六〇〜一七二八）であったとすれば万治二年の再建後、障壁画が描き直されるなどの修繕が加えられていることになる。一方で、万治二年であれば、狩野右近常信が描いたはずの遠侍間が「カノ右近孝信」と記されており、万治二年以降の状況としては不自然な記載もある。万治二年以降、弘化元年以前の江戸城の障壁画の図様と絵師を記した文字史料としては、「御本丸御坐敷御廊下絵様之覚」（仙台市博物館蔵）や『柳宮秘鑑』（徳川礼典録）などが残されている。それらの史料と本絵図を照らし合わせると、それぞれ若干の相違はみられるものの、概ね同様の情報が記載されている。

【類例】
 本絵図の特徴であった、障壁画、女中詰所、戸田五助、御時計間番の

表2 類例一覧

資料名	所蔵・請求番号	障壁画	女中詰所	時計間番（下部屋）	桐之間番（下部屋）	戸田五助	時期	備考
江戸御城絵図	東京大学史料編纂所、171341	○	○	○	×	○	正徳～享保	
江戸城本丸御殿絵図	東京大学史料編纂所、保296	×	○	○	×	○	正徳～享保	
（江戸城本丸表・中奥図）	国立歴史民俗博物館、H-1855-2149 （幕府儒学者杉原平助関係史料）	○	○	×	×	×	正徳～享保	納戸口（老中口）に「御大老へや」（井伊直該か）あり。
江戸御城殿中図	徳川林政史研究所、図物甲1077	×	○	○	○	×	正徳～享保	中之口の下部屋に林大学頭、林百介（百助、信智）の部屋あり。
江戸御城内御住居之図・御見附略図	ライデン大学図書館、SER337	×	○	○	○	×	正徳～宝暦	享保から宝暦期頃に、老中、若年寄を務めた人物の名前が老中口に記されている。
於武州徳川殿御城之内御本丸絵図	個人蔵	○	○	○	×	○	正徳～寛政	寛政期頃に老中、若年寄を務めた人物の名前が老中口に記されている。

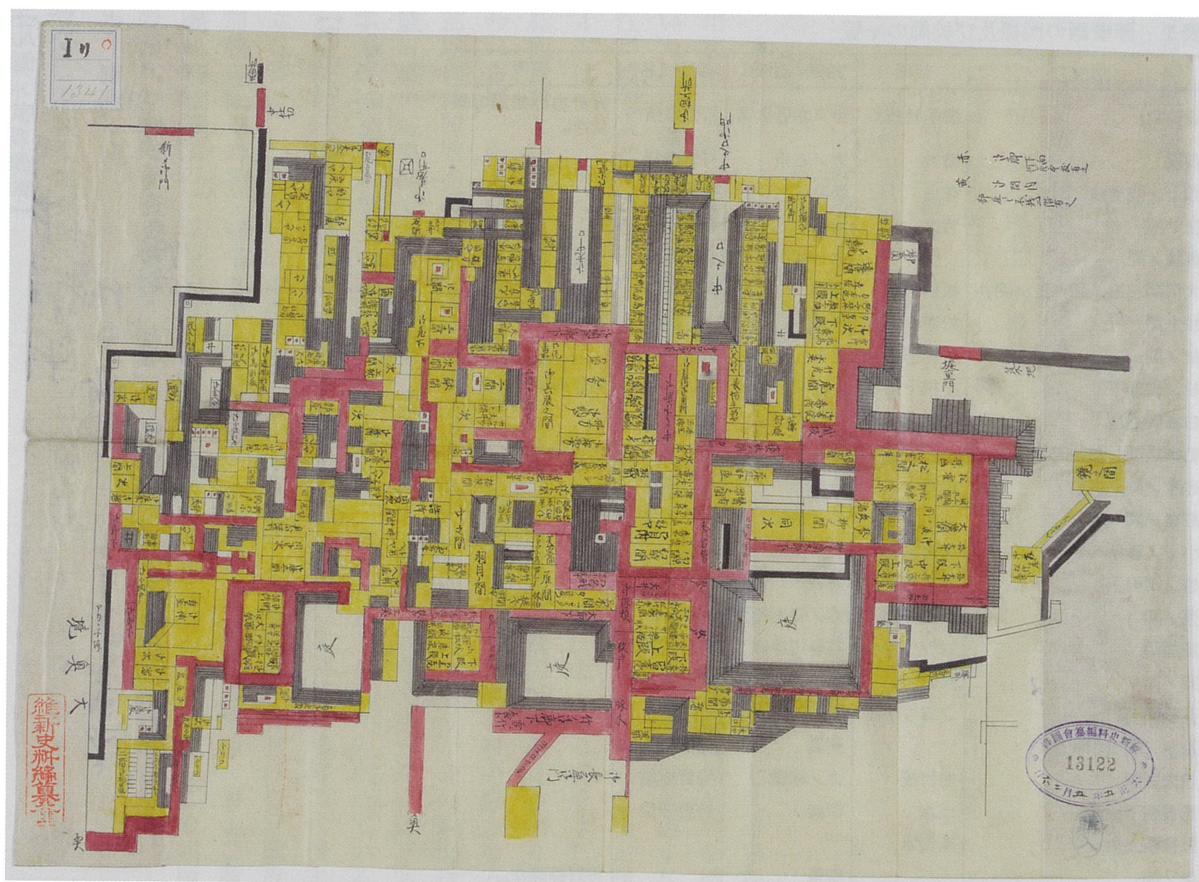


図1 御殿図



図2 城郭図

下部屋などの記載を手がかりに、類例を調査したところ、複数の絵図が見つかった。ただし、本絵図と全く同一の記載がなされているものは管見の限り見当たらない。類例絵図の記載事項は表2のとおりである。本絵図および類例絵図を比較すると、これらの絵図はいずれも複数の時代の情報が混在した



図3 表紙（右）と包紙（左）
折畳サイズから本図は懐中用と考えられる

絵図となっており、ある特定の時期の御殿を描いた絵図ではなく、ある時期の御殿の絵図を基に、その時々ของผู้用者が必要に応じて情報を追加ないし修正して作られたものであることが窺える。
(高橋喜子)

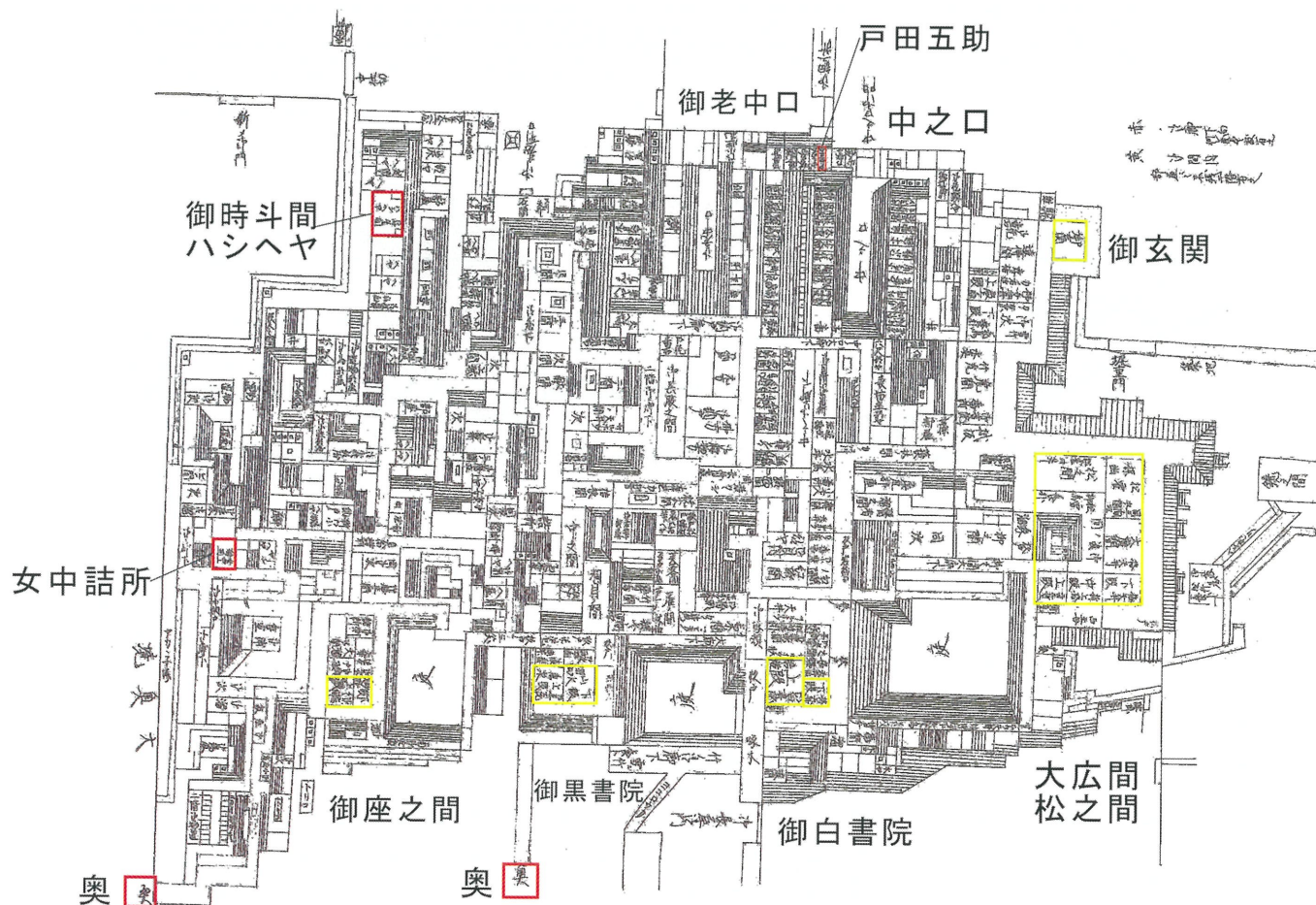


図4 御殿図のトレース図

ゴシック体の黒い文字はすべて絵図の記載に基づく。赤の囲いは注目すべき記載。黄の囲いは城内の間取を把握するために便宜上補った。